
世界を滅ぼすためのスイッチ

三本指

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を滅ぼすためのスイッチ

【Nコード】

N5204Y

【作者名】

三本指

【あらすじ】

神様の退屈しのぎとかいうものに、命がけで付き合わされるらしい。やってられん。

……夢？

「ぱんぱかぱんぱーん」

気が付いたら、真っ白な世界にいた。
上も、下も、右も、左も、白一色。
立っているのがどこかもわからない。

違うところが、ただ二つ。

俺。んで、奴。

「おめでとう、おめでとうさん！」
どうも。

「いやー、兄ちゃんあんた素晴らしい！
照れるね。」

「よつ、大将！何か一言！」

「あんた誰だ？」

「悪魔。」

まいったね。

「えらいちつこい悪魔もいたもんだね。」

「あんたがでかいのさ。」

いや、そうでもないよ。

「しかも悪い奴じゃなさそうに見える。」

「そうかい？」

それにしては間が抜けてるし。

「何より怖くない。」

「がおー」

……黙秘権。

俺に今見えてるのは、子供向けの絵本に出てきそうな赤い三角できた目と口の付いた影だった。

それが地面から生えてきてる。地面がどこかわからないけど。奴が生えてきてるところが地面。そうしよう。

「ほんで悪魔くんよ。」

「呼び捨てでいいぜい。名前はないけどー。」

「じゃ悪魔。」

「はいはい。」

「どうして俺は誉められたわけかな？」

「いい質問だねえ。」

それ誰の真似？

「君はねえ、お兄さん。勇者に選ばれたのさ。」

「はあ。」

「リアクション薄いなあ。」

「どっひゃー。」

「……わざとらしくすぎるよ兄さん」

「世界を救った覚えがないからしょうがないねえ。ああ、さすがにゲームならなんべんかは俺もメシアさまやってましたぜ？」

「ノンノン、少年違うのさ。」

影の一部が伸びて横に振られる。手かよそれ。

「君は世界を救うわけじゃない。世界を守るのさ。」

「はあ。」

「またまたリアクション薄ッ！何か思わない？」

アホらしくなってきたのでとりあえずその場に座り込む。

「また今日は偉くシユールな夢を見てるなと。」

「ほうほうどんな？」

「やたらフレンドリーな悪魔に勇者へとジョブチェンジした旨を告げられる夢。」

「夢じゃないんだけどなー」

「そう言われてもねえ。」

「まあーいいですよ。悪魔さんそういう反応をされるのは予想してました。」

「ほう。まじでか。」

「どうせここで何を言ったって信じないだろうから説明だけしちゃうつもりなわけよ。」

「そつえば……」

……ああ、夢の中か。

「夢じゃないのだよ。精神世界とでも言おうか。もしくは素敵悪魔空間。」

「真っ白なの？」

「白が好きな悪魔もいるさ！」

「君は黒いじゃん。」

「悪魔ですから。」

さいですか。

「ちょっとー。兄ちゃん話の腰を折らないで欲しいなー。」

「うーん……。オッケー。聞くよ。」

「あ。ありがとうございます。」

そういうのはいいから。

「で、勇者に選ばれた兄さんには凄いいプレゼントが贈呈されます。それがこちら”世界を滅ぼすスイッチ”イイやつふー……！」

「ちょっと待て」

「え？」

「おかしいだろが」

「何が？」

「まずスイッチなんて見えないし。」

「まあ目に見えるようなものじゃないからねえ。」

「どうやって使うの？」

「それはねー、”神様僕は世界を滅ぼしたいです。”とか、”世界なんて滅んでしまえ”なんて頭の中で唱えるだけ。なんて便利！
おういえー！」

「神様僕は世界を滅ぼしたいです。」

「ちよちよちよちよつつー！」

自称悪魔が慌てた様子で手を振る。

「危ない！あぶない！」

「何が？」

「世界滅ぶところだったよ？今！！」

「なんともないじゃん。」

「心優しい悪魔さんが今の一回はノーカンにしました！クーリングオフ！かろうじてセーフ！感謝して悪魔さんに！」

「どういたしまして。」

「これはこれはご丁寧に。いや違うツ！どうして僕が感謝してるの！？とにかくそんな簡単に使うもんじゃ無いでしょ少年！」世界を滅ぼすスイッチ”だよ！？」

「そうだね。」

「うわ不安だなー。いい笑顔だなー。これ早いとこ説明した方が良さそうだなあ。」

「ていうかさ」

「ん？」

「守るんじゃないかったの世界？駄目じゃん、滅ぼしたら。」

「あーそのことねー。いや大事なんですよそこは。キモよキモ。今

回のルールの。」

「……キモ。」

「傷付くツ!？」

そりゃあ素晴らしい。

「まあいいや。説明しよう!君は世界を滅ぼす事ができる。しかし、世界を守る事もできるのだ!」

「知ってる。」

「な、なんだってー!!?」

ちよつと本気で帰りたくなってきた。

「さつき君から聞いた。」

「なんだー。そーいうことかー!びつくりしたよ悪魔。やるねー、悪魔を驚かせる人間なんてそういないよ?さすが勇者様!」

「どうも。」

返事まで投げやりになってきた。

……………いや、最初からだね。

「まーぶつちゃけるとー、君以外世界を滅ぼせないの。」

「意味がわからない。」

まず人類には一人で世界を滅ぼす力はありませんが?

「君がスイッチを使って世界を滅ぼすまで、この世界はどうやっても滅びません。戦争が起きてもー、天変地異が起きてもー、核ミサイルが降つてもー、隕石が落ちてもー、メテオー!凄くない?人間もなんだかんだ生き延びます。数は増えたり減ったりするけどね。」

「難しいね。」

「今の説明で!?悪魔さんショックだよ、わかりやすすくない!？」

「でもさ」

「ウソ、スルー!?わかりやすく頑張っただけだなー。」

「俺が死ぬまでに世界が滅ぶ可能性の方が少ないと思うんだけど。百年?五十年?大きな戦争が一回起こるかなってとこだ。だったら別に俺が守ったわけじゃないよね?むしろ世界を滅ぼす可能性のある危ない人じゃん。」

「なんだー！ちゃんと理解してるじゃないですかー！さすが勇者君。」

「で、どうなの？」

「どう思う？」

「……質問に質問で返すなって学校で習わなかった……？」

「習わなかったー！悪魔だから！」

自称悪魔はそう言つて凄く楽しそうな笑いを浮かべた。

「初めて君を悪魔らしいと思ったよ。」

「うやひやひやひや！遅いよー！早いとこ気づいてくれないとさー

あ？」

「そうみたいだ。」

「うふふふ！怖いなあキミ。悪魔は初めて君を怖いと思ったよー。最初はただのすつとぼけたバカチンだと思つてたけど。そんな顔もできるんだねー？」

「そう？いつもどおりの寝ぼけた顔だと思うけどね。怖い？はじめて言われたねえ。」

「人間から見ると何も変わってないよ確かにー。でも悪魔から見たとわかるのさ。君の苛立ち。君のムカつき。君の不安。君の恐怖！怖い人だよ君は！」

「……はっ、…傷付くなあ。」

「こりや意外！勇者もこんな下らない事で傷付くんだねえ？まあいいよ。そろそろ、からかうのも申し訳なくなってきたからさ、教えてあげる。君はさ、死なないの。世界を滅ぼすまで。」

「そりや凄いい。」

「凄いいそりやあ！不死身ですよ？世界を滅ぼすスイッチと、不死身のカラダ。どんな王様も手に入られないご褒美を、君は二つ同時に手に入れたのさ。贅沢！」

「じゃ、いらない。」

「残念ながら返品不可能です！ナマモノですから！」

「贈り主に直談判したいんだけど。」

「それはいくら君でも無理な話さ勇者様！神様と話がしたいなんて！」

「えらく適当な神様だね。こんな一庶民にそんなものプレゼントしちゃうなんて。」

「そう！それが素晴らしいのさお兄さん。神様は暇で、飽きて、つくに退屈を感じてる！だからこんな馬鹿な事を悪魔まで巻き込んで遊びだすのさ。君が願うまで世界は滅びない。世界を滅ぼすまで君は死なない。ゲームの期間は本当の無限。君が願えば悪魔も神様もきれいさっぱりいなくなる。神様に選ばれた君は一体どんな理由で世界を滅ぼすのかな？」

「いや、かな？っていわれてもさあ……。」

わからんねえ。

自分から世界を滅ぼす奴なんて、いるわけない。

少なくとも、俺はしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5204y/>

世界を滅ぼすためのスイッチ

2011年11月17日21時38分発行